

平成30年度修了生 修士論文概要

論文題目：20歳代にキャリアチェンジした中年期女性のライフ展望

—キャリア・アンカーの検討—

氏名：渥美 孝子

概要

本研究では、20歳代にキャリアチェンジを経験しながら、環境に適応しようとしてきた中年期女性が、現在どのように自己のライフキャリアを認識し、理解するのか。また、今後どのように自己のライフキャリアを展望していくのかを明らかにすることを目的とした。インタビュー協力者は、20歳代でキャリアチェンジをした中年期の女性11名であった。現在仕事をしていますか、なぜ仕事を辞めたのですかなど、仕事に関する5つの質問項目を作成し、半構造化面接を実施した。また、2種類の刺激文を提示し、感想を述べてもらった。計量テキスト分析である共起ネットワーク分析を用いて、中心性の高い語を抽出し、検討した。この研究から、以下のことが明らかとなった。

1. 各インタビュー協力者より、ライフキャリアを特徴づける「キャリア・アンカー」とみられる中心性の高い語が抽出された。その協力者の中には、危機に遭遇したことにより、「キャリア・アンカー」が変容したと思われる女性たちがいることが明らかとなった。
2. 刺激文Iでは、＜アドバイス型＞と＜共感型＞の2つの発話のまとまりが見出された。

インタビュー協力者は、結婚・出産・育児などの理由で職を継続していない女性がほとんどであったため、刺激文Iの主人公を理解し、共感することが容易であったと考えられる。

刺激文IIに関しては、各協力者それぞれの価値観・思い・気持ちの相違があるため、刺激文IIの主人公に対する様々な発話が見られた。その中でも、仕事に関しては、協力者10名に対し、9名が多く言及をし、高い関心を示した。

論文題目：「不登校経験者の不登校の意味と価値に関する面接調査」

氏名：大橋 佳奈

概要

不登校には一般的にネガティブなイメージがあり、当人もその経験を肯定的には捉えづらい現状がある（福岡・松井・笠井，2014）。不登校のポジティブな側面を取り上げた研究は少なく、また、不登校経験のポジティブな側面に意味づけをしたり、不登校経験による自己成長感が高かったりした者はレジリエンスが高く、不登校の予後が比較的良いとい

う報告もある（浮田・福島・長谷川，2014）。これらのことを鑑み、本研究では、不登校の意味と価値を明らかにすることを目的とした。

研究の同意を得られた不登校経験者9名（20代から30代の男性4名・女性5名）に40分から50分程度の半構造化面接を実施した。面接内容はICレコーダーにて記録し、逐語録を起こして分析をした。分析には、質的分析の困難さを克服するために開発され、明示的で定式的な手続きを有する初学者にも着手しやすい手法として大谷（2008）が考案したSCATを用いて分析を行った。

分析の結果、不登校の意味と価値として、6点明らかとなった。①不登校に対してのポジティブな捉え方を持つこと、②不登校・ひきこもりの捉え方の変化が起こること、③自分を見つめることが出来るようになったこと、④性格のポジティブな変化が起こったこと、⑤適応的な思考の変化が起こること、⑥やりたいことを見つけられることが挙げられた。加えて、不登校を乗り越えられるきっかけとして、人との出会い・関わり、夢が出来たことの2点が明らかとなった。

論文題目：女子大学生における摂食障害傾向と友人関係の関連

—社会的比較志向性、対人的傷つきやすさを中心に—

氏名：小倉 真奈美

概要

【目的】摂食障害は、摂食または摂食に関連した行動の持続的な障害によって特徴づけられ、身体的健康または心理社会的機能に障害を与える。先行研究から、発症に関する要因として主に文化社会的要因、心理学的要因、生物学的要因の3つが挙げられている。そこで本研究では、心理学的要因のうち従来あまり指摘されてこなかった友人関係をとりあげ、摂食障害の関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】対象者は一般女子大学生348名であり、質問紙調査を行ない比較検討した。質問紙のフェイスシートには、年齢、身長、体重、「友人とはどのようなものだと思いますか」という自由記述を含んだ。質問紙に使用した尺度は、EAT-26、友人関係尺度、対人的傷つきやすさ尺度、社会的比較志向性尺度であった。

【結果】全対象者を摂食障害傾向の高さによって群分けした（摂食障害傾向高群、摂食障害傾向低群）。群ごとの比較によって、（1）摂食障害傾向高群は他者との比較を行いやすい傾向があること、（2）摂食障害傾向高群は表面的には友人と群れるという行動をみせるが、内面的には対人関係において傷つきやすいというアンビバレントな心性をもっていることが明らかになった。また、内容分析でも、友人に対してアンビバレントな感情を持っていることが明らかになった。

【考察】摂食障害傾向高群は友人関係においても病理的な心性があらわれていることが明らかになった。

論文題目：女子青年が認知した両親の夫婦間葛藤と精神的健康との関連
—母子関係における精神的自立の視点から—

氏名：掛山 裕晋

概要

【目的】母娘関係における精神的自立の発達様相による、女子青年が認知した両親の夫婦間葛藤と女子青年の精神的健康との関連を検討する。

【方法】自尊感情尺度、母子関係における精神的自立尺度、子どもが認知した夫婦間葛藤尺度、自己非難尺度、CES-Dうつ病自己評定尺度からなる質問紙調査を実施した。過去3年間で2年以上両親と同居している関東圏内の女子大学生307名を分析対象者とした。平均年齢は19.09歳 (SD=1.13) であった。

【結果】母子関係における精神的自立尺度の2つの下位尺度の得点より、依存葛藤型、母子関係疎型、密着型、自立型に類型し、4類型の多母集団同時分析を実施した。モデルの適合度は $X^2=231.5$, $p<.01$, GFI=.86, AGFI=.74, NFI=.76, CFI=.82, RMSEA=.079であった。全類型で、葛藤の激しさの認知が境界不全型巻き込まれを介し、恐れ・身体反応と自己非難に正の関連が示された。依存葛藤型と母子関係疎型は境界不全型巻き込まれから抑うつに、母子関係疎型では自己非難から抑うつに正の関連が示された。

【考察】女子青年は両親の夫婦間葛藤を目撃し、巻き込まれる感覚を抱くことで、恐れを感じ身体反応を示したり、原因が自分にあるのではないかと考えるようになる可能性が推測される。一方、精神的健康との関連においては母親との精神的自立の発達様相によって異なる可能性が推測される。今後、本研究によって示された類型による関連の仕方の違いが生じた要因について検討することが求められる。

論文題目：中学生の受験競争観と学習動機、受験不安、学習態度の関係

氏名：木下 莉彩子

概要

【目的】中学生を対象に受験競争観（消耗型競争観と成長型競争観）と自律的学習動機（学習動機が内的か外的か）、試験不安、規定方略傾向（試験勉強のためだけに学習をしているかどうか）の関連を検討することを目的とした。また、高校受験をする公立中学生と高校に内部進学する私立中学生との間に受験競争観に違いも検討した。

【方法】関東圏内の中学3年生172名を対象に、質問紙調査（受験競争観尺度、自律的学習動機尺度、試験不安尺度、規定方略傾向尺度）を実施した。

【結果と考察】「消耗型競争観」の学習者は外的な学習動機や受験不安が高い一方で、「成長型競争観」を持つ学習者は内的な学習動機が高いことが示された。また、「消耗型競争観」を持つ学習者において、自身の将来の成功や希望する大学のために学習を行う「同一化的調整」の傾向と周りに怒られるから学習を行う「外的な学習動機」が失敗不安と関連

することが明かとなった。公立・私立では、公立の方が私立よりも「成長型競争観」と「消耗型競争観」両得点が高いことが示された。高校入試における競争が学習者に与える影響は、受験競争観によって異なることが示された。

【今後の課題】 今後は、性別や学力水準別で検討ができるよう対象者を増やして検討をしていきたい。また成長型競争観を持てるように競争観を変容させるための方策など、受験における競争を活用する視点から研究を行いたい。

論文題目：青年期女子の親準備性に関する研究

—その影響要因及び発達のためのエクササイズの効果の検討—

氏 名：芹田 真帆

概 要

本研究では、研究1で、青年期女子の親準備性に関する実態把握をすること、研究2では親準備性を発達させるエクササイズを作成しその効果を検証することを目的とした。

研究1では、関東圏内X大学の女子大学生173名（M：18.87、SD：0.65）を対象に質問紙調査を行った。質問紙は、「母子関係における精神的自立尺度」「親準備性傾向尺度」「母親イメージ尺度」で構成した。その結果、母親イメージが親準備性に正の影響を与えていることが明らかとなった。

研究2の調査対象者は、関東圏内Q大学の女子大学生98名（M：19.68、SD：0.99）であった。育児ストレス場面における刺激文を作成し、対処法の物語を作るエクササイズをしてもらった。そのエクササイズの前後に母親イメージ尺度に回答してもらった。その結果、有意にエクササイズ後の母親イメージの方がポジティブであることが明らかになった。上述の研究1の結果より、母親イメージが親準備性に正の影響を与えていることが明らかとなっている。よって、本エクササイズは、間接的に親準備性を発達させることが期待できると考察した。また、エクササイズで得られた自由記述について、計量テキスト分析を用いて検討したところ、居住形態、出生順位で違いがあることが示唆された。子どもへの対処法として、実家暮らし群では「相談」を、一人暮らし群は「しつけ」を重視する傾向にあることが示唆された。一人暮らし群は、親から離れての生活のため、社会性をつけることの重要性を強く認識しているためではないかと考察した。この仮説についての実証的な検討は今後の課題である。

論文題目：女子大学生における就職不安に関する研究

—完全主義傾向とソーシャルサポートの視点から—

氏 名：戸倉 美美

概 要

本研究は、完全主義傾向とソーシャルサポートが就職不安にどのような影響を与えているかを検討することを目的とした。また、ソーシャルサポートに関しては、緩衝効果についても検討することも目的としている。

対象者は一般女子大学生278名であり、質問紙調査を行った。質問紙のフェイスシートには、年齢、就職活動状況、「就職活動中に役立ったことを自由にお書きください」という自由記述を含んだ。質問紙に使用した尺度は、①就職不安尺度、②新完全主義尺度、③学生用ソーシャルサポート尺度であった。

結果、完全主義傾向を高群と低群に分け、就職不安の比較を行ったところ、完全主義傾向が高いと就職不安が高いことが明らかになった。ソーシャルサポートの緩衝効果を検討するため、完全主義傾向とソーシャルサポートを高群と低群に分け、就職不安尺度の総合得点を従属変数とした2×2の2要因の分散分析を行った。完全主義傾向の主効果が有意であり、完全主義傾向が高いと就職不安が高いことが明らかになった。しかし、ソーシャルサポートの緩衝効果は見られなかった。重回帰分析から、完全主義傾向とソーシャルサポートは就職不安に負の影響を与える場合もあるが就職活動状況によって変わってくるということが明らかとなった。また、内容分析から情理的サポートが就職活動に役立つことが分かった。

完全主義傾向の中でも「自分の行動に疑いを持つ傾向」は不安を抱きやすい傾向であるため、情理的なサポートを提供しつつ就職不安の軽減を図る必要が考えられる。

論文題目：女子大学生の“離家”の有無による親子関係意識の違いについて

氏名：富永 紗央

概要

若者は成人したら離家（親元から離れること）するべきであり、それが自立だという規範的前提が若者研究には暗黙に存在したが、現在の多様化した社会ではその枠組みの有効性が問われている。現在は大学進学を機とする離家も増加し、また大学生は自立を巡る中で親との関係を強く認識し、距離の取り方によって親子関係は大きく変化する。だが、学生を対象に離家の有無による親子関係や自立意識の差異を検討した論文はまだ多くないため、離家経験者・非離家経験者の8名の学生に親子関係意識と自立意識をインタビューし、両者の考えを明らかにし、また意識の差異があるか検討した。その結果、離家経験者からは①大学進学・自己成長・地元環境の圧力からの離家動機、②親との離家による丁度いい距離感、③母への親密性と尊敬心、④父への客観視による変化の有無、⑤将来不安と親への甘えの5つ、非離家経験者からは①母親との親密な関係、②父への進まない再評価、③離家を躊躇する親への甘えと就職活動による変化の3つが考察された。また両者間の差異として、①離家経験者は非離家経験者に比べ、親子関係の中で母親との親密な関係や父親の再評価など離家の前後で気持ちに変化が存在、②離家経験者は大学生活の中で緩

やかに自己成長し、自立へ向かっていくのに対し、非離家経験者は就職活動の時から急速に自立への気持ちが加速して形成されていく、という2点が推察された。

論文題目：女子大学生のカウンセリングへの被援助志向性と共感性、ソーシャルサポートとの関連について

氏名：萩原 沙知

概要

本研究の目的はカウンセリングへの被援助志向性と共感性、ソーシャルサポートの関連について明らかとすることである。A女子大学の学生に質問紙を配布し、そのうちの408名を対象に分析を行った。質問紙には①フェイスシート②大学生用ソーシャルサポート尺度③被援助志向性尺度④援助要請スタイル尺度⑤多次元共感性尺度を用いた。相関分析からソーシャルサポートと一般的な被援助志向性に正の相関があった。重回帰分析からカウンセラーへの被援助志向性は家族への被援助志向性の下位尺度の「家族への被援助に対する懸念や抵抗感の低さ」と友人への被援助志向性の下位尺度の「友人への被援助態度に対する肯定的態度」に正の影響を受けていた。共分散構造分析から家族への被援助志向性と家族のソーシャルサポートが友人やカウンセラーへの被援助志向性に正の影響がある。このモデルでは共感性の下位尺度の「他者指向的反応」と「視点取得」が家族・友人・カウンセラーへの被援助志向性に影響を与えていた。カウンセリングについて自由記述を求めた内容分析から、カウンセリングの効用など肯定的な意見が多かった。その一方、カウンセリングへの躊躇や不満もあった。本研究から共感性の「他者指向的反応」と「視点取得」が被援助志向性を高める。家族への被援助志向性と家族のソーシャルサポートがカウンセラーを含めた援助者に援助を求めることの基盤となる可能性があることが示された。

論文題目：3歳までの両親の育児感情と青年期の子どもの精神的健康の関連

—父親の育児参加関連要因、両親のコミュニケーション・スタイルの視点から—

氏名：畑 久美子

概要

【目的】 3歳までの両親の「育児感情（育児肯定感・育児不安）」と「青年期の子どもの精神的健康」を調査し、その関連を明らかにすると共に、「父親の育児参加関連要因」、「両親のコミュニケーション・スタイル」との関連を検討することを目的とした。

方法：女子学生（N=144）とその保護者を対象に質問紙調査（子どものGHQ-28、両親の育児感情尺度、父親の育児参加関連要因、両親のコミュニケーション・スタイル）を実施した。

【結果】 1) 子どものGHQ-28を従属変数、両親の育児感情を独立変数とした重回帰分析

の結果、有意な関連はみられなかった。2) GHQ-28を従属変数、両親の育児の状況、両親のコミュニケーション・スタイルを独立変数とした重回帰分析の結果、父親の労働時間、職場の雰囲気に対する認識、自由時間の無さ、夫の「没交渉」が「不安と不眠」に有意な関連を示した ($R^2=.23$, $p<.10$)。3) 両親の育児感情を従属変数、両親の育児の状況、両親のコミュニケーション・スタイルを独立変数とした重回帰分析の結果、父親の親になることの経験・学習、育児参加の多さ、情緒的サポートが父親の育児肯定感 ($R^2=.39$, $p<.001$) に、妻と夫の「問題取組」が母親の育児肯定感 ($R^2=.27$, $p<.05$) に、妻の「対立」と夫の「問題取組」が母親の育児不安 ($R^2=.32$, $p<.01$) に、有意な関連を示した。

【考察と今後の課題】両親の育児感情と、青年期の子どもの精神的健康に有意な関連はみられなかったが、育児の状況との関連が一部みられた。今後、健康度の低い群の検討も必要である。

論文題目：教員の指導態度が学級風土と児童の心の健康に及ぼす影響について

氏名：平田 祐子

概要

【目的】

本研究は、教員の指導態度である受容的態度 (A尺度) と要求的態度 (D尺度) がどのように学級風土と児童の心の健康に影響を及ぼしているかについて検証を行うことを目的とした。

【仮説】

担任教師が「要求」的態度よりも「受容」的態度を行う方が、学級風土が安定し、児童の心の健康が保たれると仮定した。

【方法】

関東圏内の小学校4年生～6年生387名に質問紙調査 (フェイスシート、子ども用抑うつ自己評価尺度、教師の指導態度測定尺度、小学生用短縮版学級風土質問紙) を行った。

【結果と考察】

無効回答113名を除いた274名 (71%) を有効回答とした。その結果、女子よりも男子のほうが自己開示を行いやすく、女子は自身の気持ちを抑圧しやすいために、日常的な楽しさに対する抑うつ気分が男子よりも高かった。

6年生の相関分析においては“学級活動への関与”と“抑うつ因子”との間に高い負の相関 ($.40 \leq r \leq .70$) が認められた。このことから、今日学校という環境の中で最高学年である6年生は、学校行事や活動の中で主体的に周囲に働きかけることが多く、学級活動にも積極的に参加することから、抑うつ気分が低下するのではないかと推察された。

また全学年において受容的態度と要求的態度はともに重要であることが示されたが、要

求的態度よりも、受容的態度で接すると学級風土が安定し、学級風土が安定すると児童の抑うつ的な気分が低下すると推察された。このことから仮説は支持されたといえる。

【今後の課題】

本調査の質問項目が多く、実施期間も短かったため、調査対象者の理解度、調査時期、項目数の短縮等を早期段階で調査対象者及び関係者と協議することが必要であったと考える。

論文題目：青年期女子の「うつ」におけるパーソナリティと認知の歪み

—「新型うつ」と「従来型うつ」との比較検討—

氏 名：古屋 千瑞子

概 要

本研究は青年期の「うつ」の特性を明らかにすることを目的に、「新型うつ」におけるパーソナリティ傾向と認知的特徴を、「従来型うつ」との比較において検討した。さらに「新型うつ」のパーソナリティ傾向における認知的特徴についても、女子大学生（N=266）を対象に検証した。

SDS自己評価式抑うつ性尺度で測定した「従来型うつ」の得点を従属変数、「新型うつ」に関連するパーソナリティ及び認知的特徴を独立変数とした重回帰分析の結果、「自己優先志向」のパーソナリティ傾向および「推論の誤り」の認知的特徴が「従来型うつ」に影響を及ぼすことが示された。「新型うつ」の症状・心理・行動特性項目得点を従属変数とした重回帰分析では有意な結果が得られなかった。次に「従来型うつ」、「新型うつ」を独立変数とした分散分析を行った結果、交互作用には有意な結果が得られず、「新型うつ」得点のみが高く、「従来型うつ」得点が低い人に「新型うつ」のパーソナリティ傾向が強くみられるわけではないことが示された。さらに「新型うつ」に関連するパーソナリティにおける認知的特徴を検証するために行った重回帰分析の結果、「新型うつ」に関連するパーソナリティの「対人過敏」と「自己優先志向」においては、それぞれに特有の認知的特徴が認められた。本研究では、「従来型うつ」の症状を多く呈する青年期女子には、「新型うつ」のパーソナリティ特徴も多くみられるという結果が示された。

論文題目：感情表出の制御と精神的不適応との関連

—生物学的パーソナリティ要因と環境的要因の比較検討—

氏 名：師岡 美里

概 要

本研究は現代青年の感情表出の制御と精神的不適応（対人的疎外感、心身症状、抑うつ症状）の関連を明らかにするとともに、生物学的パーソナリティ要因（動機づけシステ

ム：BIS/BAS)と環境的要因(親の養育態度：養護/過保護)が感情表出の制御に与える影響について検討することが目的であった。女子大学生(N=234)を対象とし、動機づけシステムと親の養育態度を独立変数とし、新版感情表出の制御、怒りの感情表出の制御、感情表出コントロールの各尺度の得点を従属変数とした重回帰分析を行なった結果、動機づけシステムおよび親の養育態度が感情表出の制御に影響を及ぼすことが示された。さらに、BISとBASを高群/低群に分け、独立変数とした二元配置分散分析の結果では、交互作用に有意差があるものもあったが、BISの高群において感情表出が抑制的になる傾向があり、BASの高群においては感情表出が活性化される傾向が認められた。動機づけシステム、親の養育態度、感情表出の制御のスタイルが精神的不適応へ及ぼす影響を説明する「感情表出の制御の精神的不適応モデル」を検証する共分散構造分析の結果では、親の養育態度の過保護により精神的不適応が高まることは示されたが、感情表出の制御および動機づけシステムの影響は統計的に有意ではなかった。本研究結果は、感情表出の制御の精神的不適応への影響は少なく、動機づけシステムや親の養育態度が感情表出の制御にある程度の影響を及ぼすことを指摘した。

論文題目：青年期のアイデンティティとキャリア葛藤

—いかにして葛藤を乗り越えたか

氏名：山本 菜美穂

概要

本研究では、女子大学生において、アイデンティティ成熟度と進路不決断傾向との関係性を明らかにすること、および将来への悩みについて質的に検討することを研究1の目的とした。また、大学生活を経て、現在就職している女性が抱く大学生の頃から現在までの将来への不安や葛藤がどのように変容していくのかを質的に検討していくことを研究2の目的とした。調査対象者は、研究1では関東圏内のX女子大学大学生189名、研究2では大学生を経て現在就職しているもしくは就職活動をしている女性9名であった。研究1ではアイデンティティ成熟度尺度および進路不決断傾向尺度の質問紙と、将来に対する悩みについて自由記述してもらった。その結果、10%水準で有意にアイデンティティの確立が職業選択葛藤因子に正の影響を与えている傾向が認められた。また、将来を考えるにあたって、1年生よりも2年生の方がより「自分」という主体性が表れる可能性が示唆された。研究2では、将来に対してどのような不安や葛藤を抱いていたか、それらをどのように乗り越えたと感じているか、などの質問を中心とした半構造化面接を行った。得られた回答は計量テキスト分析にて、転職あり群と転職なし群の差異などについて検討した。その結果、自分に適した職業を探す段階においては自分自身が揺れ動く感覚を感じ、進路不決断傾向が高まるが、就職を前にして感じることは不安が主であり、キャリア選択における葛藤はあまりないという仮説が得られた。また、就職前後に抱く不安は、転職などを経て薄

れていくのではないかという仮説も得られた。

論文題目：若者のLINE既読無視や未読無視に対する気分状態について
—受け手の愛着形成と送り手に対する好意との関連—

氏名：米沢 美冴

概要

近年インターネット利用率が上昇しており、子どもの「学び」や「遊び」が変化してきている一方でトラブルが発生している。インターネット利用の中でも、10代、20代のソーシャルメディア利用率、利用時間が増加傾向にあり、中でも利用率が高いのがLINEである。LINEには「既読」や「スタンプ」などの便利な機能が備わっている一方で、「既読無視」や「未読無視」などによるトラブルにより、いじめや不登校などの問題が生じ、LINEいじめと呼ばれている。

そこで本研究では若者を対象に質問紙調査を行い、LINEの既読無視や未読無視に対してどのような気分状態が生じるかについて、また受け手の愛着形成や送り手に対する好意との関連についても検討した。

調査対象者は、関東圏内の女子大学1年～2年生189名であった。フェイスシート、Douglas（横山訳）のPOMS2 成人用短縮版や戸田の内的作業モデル尺度、藤原らの日本語版Love-Liking尺度などの質問紙調査を行い、基礎統計、相関分析、一要因の分散分析を行った。

その結果、以下のことが明らかとなった。

1. LINE既読無視、未読無視をされた際に感じる感情と愛着とは関連がみられないこと。
2. 「どちらも不快に思わない」と答えた回答者より、「既読無視をされたほうが不快」または「未読無視をされたほうが不快」と答えた回答者のほうがPOMS2のネガティブな感情5因子「怒り・敵意」「混乱・当惑」「抑うつ・落込み」「疲労・無気力」「緊張・不安」を感じやすいこと。

論文題目：放課後等デイサービス利用者の援助ニーズの考察
—保護者の視点から—

氏名：渡邊 孝祐

概要

【問題と目的】2012年、厚生労働省は放課後や学校が休業するときに障がいをもつ子どもが過ごす場所として、放課後等デイサービス（以下、放デイ）を制度化したが、一定の質が担保されているとはいえない現状がある。より良い支援を提供するためには、子ども

(利用者)のニーズと保護者のニーズを把握する必要がある。そこで本研究は、保護者の視点に焦点を絞り、「放デイを利用している保護者は何を求めているのか」についての検討することを目的とする。

【研究Ⅰ方法】放デイを利用している保護者のうち、協力の同意の得られた5名に対して半構造化面接を行い、M-GTAを用いて分析を行った。

【研究Ⅰ結果・考察】今後求めることとして<自立を促すような支援内容>など7つのカテゴリーが示唆された。結果で得られたニーズに応える支援を検討すること、それらの支援と利用者の満足度との関連などについて今後検討する必要があると考えられた。

【研究Ⅱ目的・方法】研究Ⅰより得られたデータをもとに質問項目を作成し、信頼性と妥当性を検討する。許可を得た放デイに質問紙配布を依頼し、同意の得ることができた保護者60名を対象に質問紙調査を行った。

【研究Ⅱ結果・考察】因子分析を行った結果、2因子が抽出され、それぞれを『保護者支援ニーズ因子』(α 係数.97)と『個別的支援ニーズ因子』(α 係数.88)と名付けた。因子分析の結果得られた因子からは、具体的な支援に関するニーズのほかに指導員の態度や学校では行うことのできない個別のきめ細かな支援を求めるニーズが存在することが明らかとなった。